

# オーストリア労働運動の社会史

—V. アドラーと禁酒運動— (1)

内 田 忠 男

## はじめに

労働運動の目標としたもののなかで、労働日の短縮、労働時間の削減は、重要度の高いものであろう。今日では「労働者の祭り」として屋内の軽音楽祭に墮してしまったメーデーは、周知のように8時間労働日を要求する国際的労働運動の一大示威運動に端を発したものであった。

それまでの農耕中心の社会経済のあり方だったら、春まっさかり、自然の恵みを満喫する機会だった五月祭を奪われて、資本の監督、管理の下に、作業場内に追いこまれて一日12時間以上も働かねばならなくなった、この「不自然さ」、「非人間的」あり方、これに抗議してメーデーは始まる。メーデーは時間短縮を求める運動日であったが、同時に open air、自由に屋外、つまり自然の大地を取り戻し、エンジョイする、人間の自然性の回復、あるいは確認の日でもあったのである。

今日、時短、労働時間の短縮は、日本の経済社会、国民生活にとって重要な問題となってきた。いわゆる第一世界のなかで一人、大勢に背を向けて、「働き蜂」として貿易黒字をつくりだしている日本の労働者の運動、行動、その意識は、嘲笑を招くまでになっている。「うさぎ小屋」に満足し、長時間労働日を甘受し、残業を唯々諾々として受けとめ、休日も営業機会に利用して（ゴルフに行き）後悔しない有様は、「過労死」が“Karoshi”と

国際的に通用するまでに有名となった労働者残酷物語が実は、労働者自体がつくりだしているのだとさえ言えよう。働くこと、他人の指揮、監督、統制の下に入って全身全霊を投入して動きまわる、このマゾヒスティックなよろこびに満足しているかのごとく見える日本の労働者の有様に、投げかけられる視線は冷たいというよりは、異質かつ不可解な生物を見るものとさえ感じられる。日本異質論は、資本の世界で語られているだけではない。日本の労働者の日常が、意識が問題とされているのだと言えよう。

しかし本論は、日本の今日の労働者の有様、あり方を俎上にのぼせるというのではない。今一度、長時間労働日のなかで時短を闘い取ろうとしていたヨーロッパの労働運動をふりかえり、労働時間の短縮＝労働者の自由時間の奪回が、労働者にとってどんな意味を持っていたのかを考えてみよう、これが本論の目的である。本論では、労働者の飲酒習慣を軸に、労働者の自由時間＝余暇を取りあげるが、舞台はウィーン、ハプスブルク二重帝国のオーストリア帝国の首都、時代は19世紀から20世紀への転換期、いわゆる「世紀末」、登場人物は、帝国現状維持の担い手となってしまったオーストリア社会民主労働者党の指導者、V. アドラー、演題は「労働運動とアルコール問題」とでも言えようか。

## I

本題に入っていくまえに、まず問題の整理のために、労働者とアルコール、あるいは労働者運動と飲酒習慣、労働運動と居酒屋 (Tavern, Kneipe) についての小論の紹介と検討から始めたい。取りあげるのは、世紀転換期のドイツの労働者世界のなかでの居酒屋 (Tavern) を論じた J. S. ロバーツの論文、「1870年から1914年までの間のドイツ労働運動における居酒屋と政治」<sup>1)</sup>である。

ロバーツは、19世紀の欧米の労働者とその世界を研究する文献でもう周

知のこととされているのは、居酒屋 (Tavern, タバーンとする——内田) が飲食物を提供・供給するところというだけでなく、それ以上に「重要な社会的施設 (social institutions)」であることだとして、論を始める。

「労働者、職人、小商人それに都市社会階層の下位に位置するメンバーにとって第一義的な社会センター (primary social center) として、タバーンはその顧客たちの生活のなかで多種多様な役割を演じた。その役割の一つは政治的意味合いであった。何故なら、タバーンはしばしば討論センターまた組織づくりのセンターとなったからである」が、この側面は、しかしあまり十分に照明があてられなかったと指摘し、「タバーン生活と政治生活そして日常政治にとってのその諸帰結」をドイツ労働運動におけるタバーンの役割を見ることで解明しようとする。

ドイツ帝国では、一般にタバーンを根城として人々が集う強力な伝統があり、他方労働者の運動を押しつぶそうとする政府側からの弾圧と労働者を社会的に排除・差別する力が働いていて、タバーンと政治との間の結びつきがことに重要であったが、これ以外にも大きな結合要因があったとする。ロバーツはその要因として、労働者の休暇、余暇時間の過し方を考えるのである。

つまり、もし労働者が食事、睡眠に必要な時間以外をすべて労働時間に吸いあげられているなら、そこにはタバーン生活も、勿論政治活動の時間もない。タバーンで使う時間にせよ、政治活動、組合活動、あるいは労働者相互の福祉活動にせよ、余暇が生れなければ、すべて不可能である。タバーンで仕事の疲れを洗い、明日の活力を得るために、また労働者としての明日を開く組織活動を進めてゆくためにも、労働者にとって自由に自分の判断で利用し采配できる時間が必要であった。いわゆる職業政治家、活動家をのぞけば、政治、組織活動に時間と力を注ぐにも、余暇、レイジャーが、一般の労働者にも生れなければならない。

この意味で、ロバーツが言うように、「政治はそれ自体、余暇活動の一つ

の形態なのである。」ではこの労働者にゆるされ、また彼らが獲得した、この自由な余暇時間を、政治に、社会民主労働者党の政治、組織活動にふりむけるとすれば、どんな場、どんな場所が彼らに存在したのかと問えば、出て来る回答、それはタバーンとなる。「タバーンは、多分、こうした機会が生じる、もっとも顕著で特徴的な場所だった。そこで、大衆的（日常的）な余暇活動の伝統的な形態が、政治組織の近代的形態と融合したのだった。」<sup>2)</sup>そして、この融合こそが独逸系労働運動の型をつくりあげたと、ロバーツは言うのである。

タバーンには、様々な姿形があり、決して一様ではなかった。金持ちの上流客向けから、農村の土地持ち農家主、売春婦、ポン引きがたむろするあやしげな店から、都市下層階級、職人、徒弟、熟練・未熟練労働者向けのものまで、その土地、客種、職業に応じて様々な性格のタバーンが存在したのである。また単一な客層の場合もあれば、混合する場合もあって、全く一括りにすることは困難だった。

しかし何故タバーンが急速に都市化するドイツにあって、労働者の間で「社会的施設」として優位を占めていたのか、その理由をロバーツは、次のように概括する。

タバーンを含め、19世紀に、酒を飲むことができる場所が多くなってきたのは、①都市の成長、②旅行機会の増大、③購買力の拡大、④国家規約の緩和などによるが、何よりもまず、「社会的需要」というより、「社会的必要物、必須のもの」となったからだ。すなわち「タバーンはたべもの、飲物そして時には宿まで提供する。読書室や集会所としても役立った。ハンブルクの港のようなところでは、高度にととのえられた雇用斡旋所 (labour exchanges) が置かれた場所で、労働者はその日の仕事を求めて集まった。」<sup>3)</sup>

しかし、タバーンの真骨頂はそこでの「社交、Social life」にあり、タバーンは住環境の延長であったと、彼は指摘するが、これは彼だけでなく、ほぼ定説となった論点である。何故、家の延長なのかと言えば、第一に、劣

悪な住居条件が挙げられねばならない。「過密かつ悲惨な住居条件を考えれば、労働者階級の居住区は、住居外に、集合しうる社会生活の諸形態を必要とした」のだと、ロバーツは、この事情を固い調子で述べている。彼は、これ以上に、悲惨な住居とタバーンの共存の関係について言及していないので、少々補足しておくこととする。オーストリア、ウィーンの場合である。

1890年の国勢調査によれば、ホテル・旅館に働く労働者の76%が、その事業所内に住み、家内手工業の女工は50%が他人の家族のベットを借りる間借人で、錠前屋職人は41%が同じ境遇の間借人、織工・靴屋・家具職・日雇いで働く労働者は45%前後がベット借りの間借人だった。住居はおろか、他人の家族の人々のベットを借りて夜露をかろうじてさけるという暮らしであった<sup>4)</sup>。それでも最低の生活ではなかった。

今日、アメリカの都市生活の暗部・恥部となっている、いわゆるホームレス・ピープルと同じ状況の人々は、ドイツ語圏では「屋根なき人々 Obdachlose」と呼ばれるが、この人々は簡易宿泊所(Massenquartier)か、緊急避難所(Obdachasytle)に、それでも金を支払ってねぐらを求めるか、あるいは橋の下、下水溝、ゴミ拾い車利用のベットなどで雨露をしのぐしかなかった。それというのも、都市住民のうち僅か35%だけが、ウィーン生れのウィーン育ちで、65%がいわば「他所者」、彼らの経済条件に合わせた住居は、豊かに準備されてはいなかったからである。

ここから、タバーンが都市下層貧民にとって不可欠の「社会的機構」あるいは「社会的施設」であったことは十二分に察しられよう。ベットが空くまで、またベットからおきあがって、これら単身(シングル)の低賃金労働者はどう過せばよいのか。長い劣悪な職場から解放されて、ベットに休めるまでの「自由な時間」=レイジャーをどこで使えばよいのか。都市中産階級の溜り場、カフェーは彼らの場所ではなかった。文盲にとって、新聞は何の魅力もなかった筈である。

彼らは、この「自由時間」の間、とにかく腰のおろせる場所を必要として

いた。それも寒冷な中部ヨーロッパにあっては、暖かい場所を。

それを提供したのが、タバーン、下層労働者向けの居酒屋であった。勿論ベットさえ間借りのシングルたちに自分で食事をつくりうる筈はなく、あたたかい、手の加わった食事はタバーンが約束するものだった。さらにタバーンは通信基地でもあった。手紙のやりとりから、人々の近況まで、ねぐらさえ持たない人々にとってタバーンは、彼らのポストであり、転々と職をかえ、住所を移らねばならなくなった労働者たちにとって「私書箱」、連絡所あるいは彼らの「定点」でもあった。

急速に膨張する都市に吸いこまれる「他所者」たち、下層貧民、労働者には、「狭いながらも楽しい我が家」もなければ、Home, Sweet Home もなかった。そうした彼らに、「ホーム」として擬似「家庭」を提供したのもタバーンであった。見知らぬ土地で、慣れない仕事と暮し、触れあいのない茫漠とした都市で、彼らが人間の顔を取り戻し、人間を見つけたす機会を与えた。ロバーツは次のように言っている。

「必要で欠くことのできない社交センターとして、タバーンは、労働者が、希望と嘆き、個人的なものであれ社会的なものであれ、それらを語り、話し合える自然な場所だった。上役や雇主、親方からの圧力もなく、お上の指図もなく、ここで彼らは自由に、一人の人間として語る機会を回復する。そして政治の話も、ここで話され、ひろがってゆく。違った職場、異なる職種の仕事が紹介され、経験、体験が生身で伝えられる。そう、タバーンは、労働者のサロン、クラブだったのである。タバーンは都市の人々がそれぞれ違ったグループに分れているのを、結びあわせる、社会的紐帯の作成を助けていた。」<sup>5)</sup>

さて、労働運動、労働者運動、あるいは労働者文化とタバーンとのかかわり合いは、どう展開するのか、と云えば、このタバーンこそ、運動の伝動軸であり、神経節であって、これなしには運動は成立・存続不可能とまで言うるのである。ロバーツによれば、「1880年までタバーンは労働運動にとっ

てきわめて重要な機構となっていた。たしかに、タバーンの経営者がすべて運動とかかわりを持つことに同意した訳でもなく、社会主義運動の始めからの社会主義者でもなかった。しかし労働運動が根をおろしたところでは、タバーンは組織的中心(センター)だった。」<sup>6)</sup>これには、労働者が多数を占める都市にあっては、労働者とその運動に背を向けることは商売に不利であったことが指摘されよう。ボイコットをさけるためには、機会を提供しなくてはならない。両者の依存関係はかなりのものであって、タバーンが協力的でない地方の場合、運動は拡がらず、停滞的となってしまう、そうした例は、ドイツの場合ライン上流地方の広い地域で見られた。依存関係にとどまらず、「共生関係」にまで進む場合もある。

労働運動に献身して解雇の憂き目にあった労働者が、糊口をしのぐすべとしてタバーンの経営に乗り出す例である。彼らは、ここで彼の心情にまた、まだ忠実でありうるができる。当然、組織も、社会民主労働者党も、彼らの影響下にある、信頼できるタバーンに労働者を誘導するし、広告・宣伝の労をいとわない。彼ら、タバーン経営者は、労働者の様々な種類、いろいろな性格の異なる集會に、施設あるいはその一部を提供することとなるが、ここが、問題であった。

「集会場(室)は無料で借りられたが、その使用には酒を注文するという暗黙の義務が伴っていた(飲酒強制、ドイツ語では Trinkzwang)。だからアルコール飲料の消費は社会主義労働運動への参加の、全くの条件であった。非アルコール飲料は広汎にあるというものではなかったし、それにビールや焼酎(Schnaps)より、一般的に、高価だったのである。」<sup>6)</sup>このことは労働運動、社会民主労働者党(以下SPと略記)の一層の前進にとっては、大きな障害となるのであるが、それは後にふれることとして、タバーンが、労働者の運動にどう利用されたのかを、まず見てみることにしよう。

「選挙のための集會や労働組合支部の集まりだけでなく、労働運動とつながりを持つ、他の団体、集団の集まりも——合唱団、教育協会、スポーツ・

クラブ等々——度合いに違いはあれ、タバーンに依存していた。』<sup>7)</sup> もう全く漫画的と言いたくなる事態もある。何と、「禁酒運動に献身する社会主義者でさえ、タバーンに集まった」のである。労働者にとって彼らの自由になる施設、場所がどんなに僅かで、かぎられたものでしかなかったかを、この悲しいエピソードは、我々につげていると言えないだろうか。

ウィーンの運動での例を、ここでも少々補足し、参照するとしよう。ウィーンのSPÖの教養委員会の依託で編纂された『ウィーンの労働者』<sup>8)</sup>は、ウィーンの労働運動の歴史にかかわる土地、建物、記念碑、施設の道案内書、手引きであるが、これをひもとくと、枚挙にいとまがないほどである。

労働者区と呼ばれるウィーン第10区ファヴォリーテンを開いてみることにしよう。

ここでは次のごとき例がある。

1. ALXINGERGASSE 18. 労働者教育協会。この地下酒場 (Kellerlokal) で、ファヴォリーテンの労働者教育協会「教養の泉」が、はじめて、居を得た<sup>9)</sup>。

ここからアジアが始まると悪口がたたかれる、都心から東へのびる第3区ラントシュトラーセ (Landstraße) では、同じく教育協会が1848年、旅館 (Gasthaus) 「ヒュルステン・ホーフ (Fürstenhof)」でウィーンではじめて結成される<sup>10)</sup>。

驚くことには、このラントシュトラーセのハウプトシュトラーセ116の地に労働者協会の読書室ができると (1868年)、翌年にはシュタインガッセ8にある旅籠 (Gasthof) 「アウゲ・ゴッテス (神の眼)」に第二の読書室が設けられる。

さらにこの地区の、別の主要道路であるレンヴェーク71 (Rennweg) にある旅館「黄金の小羊 (Zum goldenen Lamm)」で、1886年この地区の労働者教育協会が結成され、300名が参加している。1888年から1890年まで、協会はやはり旅館「黒門亭 (Zum schwarzen Tor)」に居を構える。

都心に近接しているものの、労働者も比較的多く居住している第4区



ヴィーデン (Wieden) でも労働運動、労働者の組織づくりが始まるのは、やはり Gasthaus からである。「野蛮人 (Zum wilden Mann)」という恐ろしい名の旅籠に 1868 年、労働者教育協会の読書室が設けられ、第 4 区の運動の揺籃の地となる<sup>11)</sup>。

労働者の心身の健康のためにと設立された労働者スポーツ・体操協会も、アルコール抜きでは成立しえなかった。1894 年 7 月、第 6 区 マリアヒルフのグンペンドルファー・シュトラッセ 91 番地のビアホール「ビーリング (Biering)」で「ウィーン体操総連合 (Allgemeine Turnverein in Wien)」が創立され、オーストリアで最初の労働者体育協会となるのである。

第 7 区 ノイバウ (Neubau) でも労働運動の始まりは Gasthaus である。旅籠「長い地下窖 (Zum langen Keller)」に地区はじめての組織が置かれる。1892 年 12 月のことであるが、1912 年はじめて労働者が自前で設けた支部に移転するまで、Gasthaus を転々としなくてはならなかった。その事情はよく解らないが、いずれにせよ、長い間 Gasthaus に依存しなければならなかったことは、ここから言えるだろう。

第 9 区 アルザーグランドも都心の第 1 区に隣接して、その北西に位置する地区であるが、ここでも少しばかりの悲喜劇が演じられている。1895 年 3 月 28 日 旅籠 (Gastwirtschaft) 「白銀の泉亭 (Zum silbernen Brunnen)」, Berggasse 5 で、「自然の友 (Naturfreunde)」の創立集会が開かれる。この「自然の友」はオーストリアに始まり、ヨーロッパから世界に広がっていった、旅行と山岳愛好者の集まりであったが、この団体の目的の一つは、アルコール中毒の災いから労働者を守ることにあったと、創立者の一人、後に第一次共和国の大統領となったカール・レンナー (Karl Renner 1870-1950) は記している。彼によれば、グループ結成の呼びかけの発起人である A. ローラウア (Alois Rohrauer 1843-1923) は設立趣旨として、次のごとく言っていたそうである。「旅行だけが、労働者を身体の墮落からまもり、旅行だけが、アルコール中毒の災いから労働者をひきはなすことができるし、そのみが労働

者を自然へと帰し、自然を科学的に観察することを教え、迷信が人々を白痴としてしまう影響力からのがれさせる」<sup>12)</sup>と。

こうした趣旨から設立、創立された「自然の友」の集會も、アルコールと密接に結びついた旅館からうぶ声をあげねばならなかったのは、運動がまだまだ始まり、創生紀にあることから来る必然であったのだろう。

労働者の運動とタバーンとの繋がり例を、ウィーンを実例の場として、挙げてゆけるのであるが、少々脱線のしすぎであるので、閑話休題、ロバーツの所説へ戻ることとしよう。

〔註〕

- 1) James S. Roberts, 'The Tavern and Politics in the German Labor Movement, c. 1870-1914'. in, Susanna Barrows and Robin Room (ed.); *Drinking, Behavior and Belief in Modern History*. Univ. o. Calif. Pr. Berkeley. 1991.
- 2) Roberts, *op. cit.*, p. 98.
- 3) Roberts, *op. cit.*, p. 100. タバーンはその外にも、失業者に、日用品（飲物・食料等の）の掛売りをしている、労働者のための「社会保障制度」としても機能していた。
- 4) *Wohnen in Wien. Wohnbau mit Gesinnung*. Antwerpen 1987. S. 19.
- 5) Roberts, *op. cit.*, p. 100.
- 6) Roberts, *op. cit.*, p. 102.
- 7) Roberts, *op. cit.*, p. 103.
- 8) *Die Arbeiter von Wien*. J. & V. Wien 1988. 400 Seiten.
- 9) *Ebenda*, S. 196.
- 10) *Ebenda*, S. 91.
- 11) *Ebenda*, S. 110.
- 12) Karl Renner, *An der Wende zwischen zweier Zeiten. Lebenserrinnerungen von Karl Renner*. Wien 1946. S. 283.

## II

タバーンが、劣悪な住居条件と地方から都市へと職を求めて移動してきて、仕事と暮しの悩み、それに孤独に苦しむ労働者に「ハイマート・故郷」

の代用物、必須の代替施設となった<sup>1)</sup>。したがって彼らは毎日そこにかようしかないとするれば、労働組合運動の活動家や社会主義政党の運動員、活動家はそこそ根城とするればよいということとなる。70~80年代、労働者、社会主義運動がパリ・コンミュン敗北後の反動期、それに続く「社会主義鎮圧法」の時代には、職場での労働者への働きかけは危険だったし、職場外でも公然活動は禁止され、非合法となっていた。こうした事情から、タバーンはまさに格好の、運動の場となったのである。悩み、不安、孤独といった問題をかかえた労働者が、職場の交替時間ごとに、それこそ定期的にタバーンを訪れる訳だから、活動家、非合法下の党员たちは守株よろしく、そこで「寝て待てばよい」。

彼らは蜘蛛、糸を出し網を張って、タバーンで「飲んで待つ」こととなる。だからたしかに、K. カウツキー (Karl Kautsky 1854-1938) が1891年、禁酒運動を運動にとって「鎮圧法」以上に危険だと攻撃したのは理由のあることだったと言えよう。カウツキーはタバーンを「プロレタリアートの政治的自由の唯一の防御壁」と呼び、次のように禁酒運動の危険性を指摘して、ブルジョア・中産階級の運動に対抗するよう警鐘を鳴らしたのであった。

「もし禁酒運動がドイツでその目標に到達することとなり、ドイツの労働者全体に自由時間にタバーンを避けるよう信じさせることとなって、(禁酒運動の改革家連が) 人の気をそそるように描きだしている家庭生活にとじこもることとなったとしたら、そうすればこれは反社会主義法(社会主義鎮圧法)がいまだかつて達成しえなかったことを実現してしまうこととなる、すなわち、プロレタリアートの連帯は破壊されてしまうだろうし、労働者を、ばらばらの、それ故に自分を守ることのできないアトムにひきおとしてしまうこととなるだろう<sup>2)</sup>と。

鎮圧法が期限切れとなった90年の後も、運動のタバーン依存はほとんど変らなかつた。組合の集会場、「労働者の家」といった労働者の自由に使用できるホール、集会室は、後述するようにこの時期以降、ドイツでもオース

トリアでもつくられはじめるが、その数は、到底当時の運動が要求するものとかけはなれていたからである。

ロバーツは、社会主義者でありジュネーヴ大学の政治経済学の教授であった、E. ミロー (Edgard Milhaud) の『ドイツ社会民主党』<sup>3)</sup>から、ミローの体験したタバーンと運動の叙述を検討し、社会主義運動と社会主義者の経営するタバーンでどんな風に運動が進められていたのかを紹介している。

ミローは1896—97年、ベルリン、ライプチヒの社会主義者の共同体のなかで生活し、運動のエリート層からその最下部組織まで知悉したのであったが、タバーンの例はライプチヒのそれである。

政治活動のために職を失った労働者が、労働者仲間に助けられてロすぎの途として始めたタバーンが舞台である。このタバーンは徹頭徹尾「社会主義者風」であった。経営者から客まで、掲げるポスターも、運動の成果と未来の勝利をつげる趣向のものだったし、本の行商人が訪れても、社会主義労働運動関係の機関紙誌の予約購読、パンフ、書物の販売でであった。彼があつかうものには「非常にたくさんな(社会主義運動の)記念品」があり、彼の商品は「マッチ箱、ワッペン、タイピンそしてカフスだが、ラサール、マルクス、リークネヒトあるいはベーベルの肖像で飾られているし、新年のグリーテング・カードも偉大な指導者の写真つき」であった。「社会主義的環境はこうしてマッチ箱からカフスに至るまで完璧であった」とロバーツは言う<sup>4)</sup>。(社会主義・労働者運動の理論・論争史ではなく、その社会史的研究といった著作が、西ヨーロッパでよく出版されているが<sup>5)</sup>、ここで多く紹介されて我々の目をたのしませてくれるのが、この社会主義的商品である。それに筆者が直接に見たもので言えば、ベルリン〔旧東独側の〕の歴史博物館、クラスゴーの「人民の家」、ウィーンの「オーストリア社会民主党・その最初の百年・1888—1988」の展覧会では、こうした品々を蒐集・保存・展示しているし、前二者は運動初期の頃の労働者の生活の物による再現につとめている。労働者の住居、その厨房、寝室、そこで使われた家具、施設、道

具、機械、勿論その衣裳も、当時のままに忠実に再現されていて、時代がよく理解できるように考えられていた。) )

このタバーンは毎日昼には一杯となる、およそ 25 人の労働者がいつも昼食をここでとるから。食事中は党の、地方ごとに出している新聞(ライプチヒでは左派系のライプチヒガー、フォルクスツァイトラック、ベルリンのフォアペルツ)を読むに暇がなく、会話はほとんどない。午後 1 時半、仕事が始まり店は閑散となるが、日もおそくなると顧客がやって来る。独身者たちは食事を、他の連中は飲み、読み、語る。土曜の夜は、細君もつれだって店は一杯となるが、こうした夜の関心はもっぱら党の絵入り風刺誌 (*Die Neue Welt*, *Der Wahre Jakob*, *Die Süddeutsche Postillon* 等) である。

とこんな風に、タバーンの日常が労働者の日常生活に編み入れられて、またタバーンが提供する場と、党関係の機関誌紙が、労働者の生活に織りこまれて、共生関係が続くこととなる。

労働者の政治的集会についてもロバーツは紹介しているが、そこで出てくる労働者像はなかなか感動的である。1891 年ケムニツの選挙向けの集会、夜 8 時に始まり、真夜中まで続き、出席・参加した全員が発言することが求められ、真剣で緊張した雰囲気が進んでゆく。工場での単調でかわりばえのしない生活のなかで、それは、熱心な学習、批判的思考、活気と鼓舞、激励といった時間だった、「永い昼間の労働の後で疲れはてて椅子に腰かけたまま睡っているのも 2,3 人はいる。が、この集会で自分の自由時間を使い尽すこととなるほとんどの人たちは、一杯か二杯のビールとタバコやサイダーを飲みながら、熱心に講義や討論を追うのだ」<sup>6)</sup>と、彼は述べている。

ここには社会主義労働運動のなかの最善のもの、相互扶助、自己改善、時代にあった社会をつくろうとする願望、強力な運動にだけでなく親密な共同体に属しているのだという感覚——があった、だからこそ、前に見たカウツキーの主張は受け入れられ、労働者の間に禁酒運動はなかなか受け入れられなかった、「何故なら、アルコールを断念するとすれば、社会主義者は政治

的行動の全スタイルと、労働運動に彼らをつないでいて、互いに強めあっている社会的政治的満足を、双方とも断念せねばならなかったからだ」<sup>6)</sup>と、ロバーツは指摘する。ロバーツの、ここでの心情は、カウツキーと同じく急進的禁酒運動（それがたとえ社会民主党に属する党员たちによって担われるものであったにせよ）の非現実性、現実の運動の無理解を糾弾しているようにさえ思えるが、さていかながなものであろうか。後に、これを取りあげねばならない。

さて、続いてロバーツが展開するのは、タバーンと党活動の共生関係が帰結するものは何かという問題である。

ロバーツは3点を列挙する。第一は、党議員団内でのタバーン経営者の数的優位である。第二は、党活動が労働者とタバーン、酒を介して連結することから、ブルジョア側から、この結合を解く目的での攻撃を招くこととなること、第三は、タバーンが男性のための制度であり、女性が入りづらいものだったことから来る、社会主義運動・労働運動内の男性優位をより強化する役割である。

第一の点は、現象的にそうだということで、ロバーツは深く追求はせず、もっぱら考察を、後の二点にしぼっている。第二のブルジョア側からの攻撃は、勿論禁酒運動を介してであるが、タバーンでの政治活動は自由な時間、労働時間の短縮があったからだと考え、労働者の時短要求に積極的に応じない態度を生むとして、ロバーツは、1890年皇帝ヴィルヘルム二世の時短要求拒否の例を調べだしている。ブルジョア側の禁酒運動は、①禁酒によってタバーンから労働者を引き抜き、中産階級主導の改革・改良運動や慈善活動に組織し直そうとするだけでなく、②労働婦人、労働者家族の主婦目当てに、家政管理改善運動までつくりだす。労働者の家政を司る婦人が、家政能力（炊事・洗濯・掃除の）に欠けているために、男性が栄養不良におちいり、きたない住居をさけて、タバーンへ主人が逃げこむという考えからである。

第三は、男性のみの世界であり、男性優位の「家庭」であるタバーンで、

社会民主党と労働組合の活動が営まれるのだから、政策はいうまでもなく、党指導部、支部役員、中間・支部指導部まで男性が支配的・数的に優越することになるのは当然であった。ここから、婦人活動家の、タバーン政治批判の声があがるのは当然と言ってよかった。

以上ロバーツは、この共生関係が作りだす問題を大きく見て、二点挙げるのであったが、本論は、オーストリア社会主義労働者運動とアルコール問題のかかわりを調べることを目的とするのであるから、ロバーツの、これらの指摘について、本論に入るまえに、若干のコメントをつけておきたい。

まず、禁酒運動 (Temperance movement) について。ロバーツはこの運動をもっぱら党と労働者を切りはなそうとするブルジョアの攻撃と理解し、共生関係が存続することに何らの疑義、危険を感じていないかに見える。そうでいいのだろうか。余暇・自由時間のすべてをビール片手に学習・討論する以外に、自由・余暇時間を、たとえば合唱、登山、自転車、スポーツ競技にふりむけてゆく活動も、もうすでに拡がりつつあるのだから。ブルジョア側からの非難・批判のきまり文句に「赤鼻の社会主義者」、「飲んで貧乏になって急進論者となる」があったと、ロバーツは記しているが<sup>7)</sup>、逆の立場から言えば下戸は社会主義活動、労働組合活動に参加できないという事態をどうするかという問題・批判を招く。運動が拡がり、社会主義理念の吸引力が強まってゆけば、社会主義運動の内部から、プロレタリア禁酒運動が出てくるのが、当然に予想されるが、これをどう考えるかである。

彼が女性社会主義活動家の運動批判を取りあげても、これに積極的意味をあたえようとせず、せいぜい紹介するにとどまっているのも、あまりに党活動＝タバーン内活動と考えすぎているためではないだろうか。

「ベルリンのフェミニストを代表して発言して、エリーゼ・シュライベンフーバーは1925年の党大会で、社会主義者の集会でアルコール飲料を出すことに(反対して)闘うべきだと求めた。『多くの婦人は党活動からしめだされていると感じている、何故なら党生活は大部分がタバーンで行われてい

るからだ。』彼女の論議が指すところは、もし労働者階級の政治が、文化的にもっと中立的な場所で行われるのだったら、家庭の領域を超えてでることは多くの婦人にとってもっともっと容易になるに違いないでしょうに。』<sup>8)</sup>

ロバーツは、これで婦人社会主義者の例からの批判を取りあげる個所を終えているが、これでは、ロバーツは判断停止なのではないかと見えてしまう。しかし、この発言は1925年、社会民主党がドイツの政治を担う「責任政党」となっている時点であるから、党とタバーンの関係はわれわれが理解しているものよりもっともっと深く、それこそ共生関係なのかも知れない。それが「正しくない」ものだとしても。(つづく)

〔註〕

- 1) (Hrsg. v.) Wolfgang Ruppert, *Die Arbeiter. Lebensformen und Kultur von der Frühindustrialisierung bis „Wirtschaftswunder“*. München 1986. S. 292.
- 2) Karl Kautsky, ‚Der Alkoholismus und seine Bekämpfung‘, in, *Der neue Zeit*. 9. Jg. N. 2 (1891) S. 107f.
- 3) Edgard Milhaud, *La démocratie socialiste allemande*. (Paris 1903), pp. 145-151.
- 4) Roberts, *op. cit.*, p. 104.
- 5) ① (Hrsg. v.) Helene Maimann, *Die Ersten 100 Jahre. Österreichische Sozialdemokratie 1888-1988*. Verlag Christian Brandstätter Wien-München 1988. Mit 538 Abbildungen, davon 186 in Farbe. 367 Seiten.  
② (Hrsg. v.) Wolfgang Ruppert, *Die Arbeiter. Lebensformen, Alltag und Kultur von der Frühindustrialisierung bis zum „Wirtschaftswunder“*. Verlag C. H. Beck München 1986. 512 Seiten.  
③ Dietrich Mühlberg, *Proletariat. Kultur und Lebensweise im 19. Jahrhundert*. Herman Böhlau Nachf., Wien Köln Graz 1986. 275 Seiten.  
④ これはもう古典に属するものになってしまったが,  
Otto Rühle, *Illustrierte Kultur- und Sitten-Geschichte des Proletariats*. Verlag Neue Kritik 1970 (Erstausgabe 1930). 590 Seiten. Frankfurt a. M.  
⑤ 図版は全くないが,  
Vernon L. Lidtke, *The Alternative Culture. Socialist Labour in Imperial Germany*. Oxford Univ. Pr. New York Oxford 1985. 299 p.  
⑥ Horst Groschopp, *Zwischen Bierabend und Bildungsverein. Zur Kultur-*



*arbeit in der deutschen Arbeiterbewegung vor 1914.* Dietz Verlag Berlin  
1987. 245 Seiten.

⑦ *Arbeiterleben um 1900.* Dietz Verlag Berlin 1985. 191 Seiten.

- 6) Roberts, *op. cit.*, p.105.
- 7) Roberts, *op. cit.*, p.106.
- 8) Roberts, *op. cit.*, p.108.